富山房

ゆりの花咲く谷間

ベラ・クリーバー、ビル・クリーバー共著
井上みどり訳

冨山房

ベラ・クリーバー，ビル・クリーバー　作
ジム・スパンフェラー　さし絵
ゆりの花咲く谷間

定価　780円

訳　者　井上みどり
発行人　坂本起一

1973年 9 月 10 日　第一刷

本文印刷　株式会社 文弘社
オフセット印刷　株式会社 集美堂
製本　富士製本株式会社

発行所　冨　山　房
東京都千代田区神田神保町1の3　郵便番号101
電話東京 (03) 291-2171～7 振替 東京 54529

© by Midori Inoue, Printed in Japan, 1973
(落丁・乱丁はおとりかえいたします)

8097-897009-7313

ゆりの花咲く谷間

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1

いつのことだったかはっきり覚えていませんが、ある日、一人の旅人が、山を越えて、わたしたちの住むトライアルの谷間へ、ふらりとやってきました。その旅人は、土ぼこりにまみれて、暑さにつかれきったようすでした。わたしの家の戸口までくると、重そうな荷物を下においてから、水をくれないかと言いました。デボラが泉から、澄んだ、歯にしみるような冷たい水をおけにくんできました。

「どこから来たの？」わたしたちはたずねました。

その旅人は、茶色に日焼けした腕をのばして、東にそびえているシュガー・ボーイ山を指さし、それから西の方に黒々とそそりたつオールド・ジョシュア山を指さしました。

「あすこからさ」

「なぜなの？」

「思い出のためさ」

その答えを聞くとデボラはおかしがりました。デボラは笑いだすと、中庭に走っていって、花盛りのしゃくなげの茂みにかくれました。そして、白いレースのような花の間から、わたしたちの方をうかがっていました。

わたしはその男に言いました。「気にしちゃだめよ。お姉さんはすこし頭がにぶいのよ。でも、おじさんはどうして思い出のために山に登ってきたなんて言ったの？　ほんとうはそうじゃないでしょ？」

「いや」と、その旅人は答えました。「うそなんか言うもんか」

「山はいま、とてもきれいなときよ」わたしは教えてやりました。「どこもかしこも花でいっぱいよ。トリリアムやえんれいそうやすみれや、春咲く花がぜんぶ咲いているわ。寒い冬が終わったところなのよ。この谷じゃ、二メートルも雪が積もるし、吹きだまりだったら、三メートルまで積もるわ。なにもかも、すっかり凍って、二度と溶けないみたいになるのよ。ロミーやわたしは学校へだって行けなかったわ」

「ロミーってだれだね？」とその旅人がたずねました。

「弟よ。冬になると、なにもかも凍ってしまうわ。冬の山ってきらい。山が汚なく見えるん

だもの」

その旅人は言いました。「今日の昼は、雲によりかかって、弁当を食べたよ。それから、坂を下りてくるとき、青い花の咲いている湖があったし、栗色の花が一面に、長いスカーフみたいに咲いているんだ。ここは美しい土地だなあ。こんなすばらしいところは、いままで見たこともない」

わたしが旅人を見たのはそのときだけでした。一時間もすると、旅人は、ときどき谷をおおう春の霧の中に消えてゆきました。でも、わたしはいつまでもあの旅人が言った言葉を覚えています——ここは美しい土地だなあ。こんなすばらしいところは、いままで見たこともない。

デボラときたら、ほんとに頭がにぶいのです。わたしたちルーサー家に、どうして一人だけデボラのような頭のにぶい者がでたのかわかりません。でも、ほんとうにデボラは頭がにぶいのです。それで、わたしたちの暮しのことは、何から何までわたしのほうが教えてやらなければなりません。デボラは十八歳で、わたしより四つも年が上なのに、わたしの説明がうまいので、すっかり信頼しているのです。

デボラはなんでもすぐに忘れてしまいます。午前中、わたしたちがアメリカまんさくの葉を

摘みにオールド・ジョシュア山やシュガー・ボーイ山のふもとに近い斜面にゆくと、いつでも、デボラはまるで初めての土地へ来たような顔をします。

「まあ！」と、デボラは叫ぶのです。「なにもかもきれいじゃないの。きれいだわねえ、メアリ・コール」

「そうね。きれいだけど、ぼんやり見とれているときじゃないわ、デボラ。さあ、着いたわ。ここまでが昨日、摘んだところよ。ねえ、この葉は厚くてきれいじゃない？　さいしょお姉さんの袋からつめていこうかしら。それともあたしのほうから先にする？」

デボラは袋を振って空にすると、その中をのぞきこみました。「どっちでもいいわ。どうせ簡単な仕事なんだから」デボラはアメリカまんさくの茂みの北側にまわると、大きな枝から、すべすべした、波形のぎざぎざのついた葉を、さっさと摘みはじめました。「昨日は何キロとれたかしら？」

「一キロ半よ。小枝を入れちゃだめよ、デボラ。葉っぱだけにしてね」

デボラは小枝を二本つまみだすと捨てました。「それで、いくらになるのかしら？」

「そうねえ、四十五セントぐらいよ」

「もし製薬会社の人や雑貨屋のコネルさんが、一度でもいいから、朝ここへ来て、この仕事をやってみれば、もっとたくさんお金を払ってくれるにちがいないわ。みんなケチ臭いわね、

メアリ」

「人によりけりだわ」

たれさがった大枝の隙間から、一すじの明るい光が揺れ動いて、デボラの顔と髪を照らしだしました。デボラは顔をそむけると、一歩さがって、谷の向こうをながめました。遠くの方に、カイザー・ピースがトラクターに乗って、すさまじい煙をもうもうと上げていました。カイザーとわたしたちをへだてている人気のない野原は、明るく黄色に輝いていました。

デボラが言いました。「カイザーはあたしと結婚したいって、また言ってきたのよ。でも、こんどもお父さんがだめだって言うのよ。あたしは結婚してもいいってお父さんに言ったんだけど、お父さんはただだめだって言うだけなの」

「お姉さんは結婚がどんなことか、ぜんぜんわかっていないんだわ。さあ、もう少し葉をとるのを手伝ってくれたらどうなの」

デボラは茂みにもどってきました。「カイザーの家はすてきなのよ。台所が気に入ったわ。ぜんぶ黄色に塗ってあるのよ。そりゃあ、あの人はだらしがなくて、家の中をきちんとできないけど、あたしならできるわ。毎日、なにもかもきれいにしてやるわ」

「そんなこと、お姉さんにできるの？」

「できるわ」

わたしはカイザーの家の迷信のことを言ってやりました。カイザーは自分の家の煙突のてっぺん近いところに鍵穴をあけてあって、そこから魔女たちを出入りさせているというううわさがあったのです。「あの魔女の鍵穴も掃除してやるの？　それとも、魔女が出入りできないようにふさいじゃうの？」

デボラは滝のようにたれさがった、長いつやつやした髪の毛をなでつけました。「あんな鍵穴なんか気にしていないわ。魔女だってあたしのことなんか気にしないわ。あたしはあの家が好きなのよ。ねえ、あたしがカイザーのお嫁さんになれば、あたしたちはみんなであの家に住めるのよ。あんたもアイマ・ディーンもロミーもあたしもお父さんも。一家そろってよ。すてきじゃない？」

「だめよ。あたしたちは今いる家がいいわ。さあ、お姉さん、葉を摘むのを手伝ってよ。手伝ってくれないの？」

考えこんだようにデボラは葉を二枚摘みとりました。「お父さんはカイザーに借金しているのよ」

「そりゃあ、そうだけど、いずれは返せるのよ」

デボラは葉を三枚そっと袋に入れました。「もしお父さんがあたしとカイザーの結婚を許してくれたら、あの人はお金のことなんか忘れて、八十平方キロの土地と今あたしたちの住んで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いる家をくれるのよ」
「お父さんはもう土地の分のお金はかせいだのよ。二十倍、いや、きっとそれ以上だわ。カイザーは家だってくれていいはずよ。倒れかかっている家じゃないの。だれも買手なんかいやしないわ」
「あんたはカイザーがきらいなんでしょう、メアリ」
「そうよ」
「どうしてなの?」
「あの人は無知なのよ。無知でなきゃ家の中に魔女の入口なんかつけやしないわ。おまけにあの人は欲ばりのうそつきよ。だからお父さんは、こんなところで、わずかなお金をかせぐために小作をさせられているのよ。そんなことってないわ。何年も何年もそんなことしてきて、いざ勘定するときになると、いつでもカイザーがふんだくっていくのよ。だから、お父さんはわずかなかせぎで我慢しなきゃならないのよ」
デボラはわたしを見つめました。「あんたはいつも相手かまわず怒っているだけなのね。いまに人相が悪くなるわよ。カイザーはさみしいのよ。どんなにさみしいか、あたしに話してくれたことがあるわ」
「そうよ。でも相手がいないのは、カイザーが悪いからよ。ずっと前のことだけど、カイザ

ーが親類づき合いをぜんぶ止めたという話を聞いたわ。さあ、この茂みはぜんぶ摘みおわったわ。もっと上に登りましょうよ、お姉さん」

昼近くになり、八月の強い日差しが、帽子をかぶっていないわたしたちの頭に照りつけるようになりました。はるか上の方には、ぼんやりとシュガー・ボーイの山の背が青黒く浮かびあがっています。あたり一面に、バルサムの鼻をさすような鋭い香りと、夏草の柔らかい、むっとするようなにおいがたちこめていました。からみあった野生のすいかずらにかくれて、カロライナひわが美しい、玉をころがすような声でさえずっていました。

葉を摘む仕事で遠出するとき、デボラはいかにもつらそうなようすでしたが、わたしの知っているつらさとはちがっていたのです。それは敏感で、心にひめた、他人にはわからないつらさだったのです。

新しい、よくしげった茂みを見つけたので、わたしとデボラは半分ずつ摘みとることにしました。デボラはすなおに茂みの周囲にそって葉を摘みはじめましたが、すぐに枝から離れて、揺れ動く緑の光ごしに、わたしの方を見て言いました。「メアリ」

「どうしたの?」

「あたし、袋を忘れたわ。さっきの場所においてきちゃった」

心配ごとはデボラのことばかりでなく、そのほかにもいろいろありました。わたしたちの父

のロイ・ルーサーのことも、アイマ・ディーンやロミーのことも、そして、わたし自身にも悩みがありました。いますぐ、させまった心配というようなものではありませんが、それだからといって、ぜんぜん気にかけなくていいというものではありませんでした。それはずっと前からわたしにとって気がかりだったことなのです。

じっさい、デボラの底抜けにお人好しのようすを見たり、大人のようなようなりをしているくせに、まるで子どもみたいな考え方をしていることを考えると、そら恐ろしくなってきます。アイマ・ディーンとロミーが笑いながら遊んでいるのを見ても、恐ろしくなってくるのです、みんなの小さな頭のなかには、正しい教育をうけるという考えなんかぜんぜん入っていないので、まったくのん気なのです。それから、せきのために体が弱ってゆくお父さんのようすも心配だったのです。（お父さんは膏薬をはったり、いろいろな薬を使っているのですが、思うように良くなりません、顔色はいよいよ青ざめ、息遣いも弱々しくあえぐようなので、わたしたちには、それがただの寄生虫のせいでないことはわかっていました。）

わたしはお父さんといくつかのことを約束していたのです。

お父さんは眠っている間に息を引きとりたいと言っていました。いよいよという時に、わたしは嘆き悲しんだり、取り乱したりしないで、お父さんが安らかに死ねるようにしなければならないのです。どんなことがあってもお医者さんを呼んではいけないし、また、だれにもお医

者さんを呼ばせてはいけないのです。もし、それが夜中であれば、朝になるまで、ほかの人たちに知らせてはいけないのです。牧師さんや葬儀屋を呼んではならないのです。山間のこのあたりにいる牧師さんはとても良い声をしていますが、お祈りをしてもらえば、謝礼を出さなければなりません。葬儀屋は料金が安いことを、しんみりと言葉じょうずに話しますが、四年前に、母の親類のコスビー・ルーサーが熱病で死んだとき、葬式料を受けとるとふきげんになり、怒りっぽくなっていました。こんどもそうなりそうです。

そんなわけで、わたしはお父さんから、おれが死んだら家族だけで埋めてほしい、と言われたのです。わたしは、お父さんの心臓と息が止まったことをたしかめてから、よく洗濯した古いシーツで死体をつつみ、オールド・ジョシュアの頂のくろえぞまつの林にある永遠の憩いの場まで運んでゆくことになっているのです。ただ、そこまで死体を運んでゆく方法については話し合いませんでした。わたしがたずねればお父さんは、ロミーの手押車を使えとか、それは玩具の手押車なのですから、足がはみだして、地面をひきずるようなときにはどうすればよいか、教えてくれたにちがいありません。でも、そんなことをたずねるのは、お父さんに恥ずかしい思いをさせることになります。

お父さんが死んだら、どうやって見苦しくなく埋葬するか気がかりでした。でも、それよりももっと気がかりだったのは、お父さんと約束したことを守ることでした。それはつぎのよう

なことでした。

一、どんなことがあっても、ルーサー家の子どもであるという誇りを失わぬこと。また、きょうだいたちにも誇りを持つように教えること。二、ただで他人にものをくれる人はめったにいないのだから、物欲しそうな顔をしていると思われないように、きょうだいたちが力を合わせて、たとえ舌が干からびてひざの上までたれさがってきても、他人から施しを受けないこと。三、いつもデボラといっしょにいること。デボラに親切に、やさしくしなければならない。弟や妹にも親切にやさしくするように心がけること。デボラをカイザー・ピースと結婚させてはいけない。万一、そうなりそうな気配がしたら、町へ行って判事さんを見つけ、デボラのようすを説明して、結婚を止めさせてもらうこと。

わたしはお父さんにこの約束をぜんぶ守ることを誓いました。でも、どうやって約束を守ったらいいのか、わたしもお父さんもわからなかったのです。お父さんは体が弱っていて、物事を考える気力もなく、起きているときもたいていポーチの椅子にすわったきりでした。正面には広々とした肥沃な谷間の景色がひろがっているのですが、お父さんはもうそれさえも見ることができないのです。病気の原因になった寄生虫か何かが、お父さんを腑抜けのようにしてしまったのです。一日に三度か四度、お父さんに薬を塗りましょうかと言うと、いつも、そうしておくれと言うので、わたしはテレピン油のびんを持っていって、のどのところにたっぷ

り油を塗ってあげます。お父さんは虫のためにそのあたりがいちばんむずむずするというからです。そんなことをしても効き目がないことは、二人ともわかっていたのですが、塗りおわるとお父さんは上体をそらして、目をつぶり、気分が良くなったよと言うのです。

ほんとにお父さんは苦労ばかりしてきました。土地のことでも、カイザー・ピースのことでも、貧乏な暮しのことでもお父さんは打ちひしがれてきたのです。もう年をとり、病気でいつ死ぬかわからないというありさまです。そしてお父さんがいなくなったら、わたしたちには、みじめな暮しが残るだけです。

お父さんを見ていると、悪いことだと思いましたが、ときどきしゃくにさわってくることもありました。また、神様、どうかわたしを助けてください、お父さん、死んじゃいや、と思うこともありました。ほんとうにそう思っていました。でも、どうせそうなるなら、早いほうがいいという気持もありました。こんな状態が続いたら、わたしたちの暮しはめちゃめちゃになってしまうし、なんとかけりをつけて、後に残るわたしたちの暮しを少しでも楽にしなければならないと思ったからです。

じっさい、これから先どうやってゆくかを考えると、恐ろしくなりました。どうしたらよいか、だれも教えてくれる人はいませんし、助けてくれる人もいません。

わたしはしだいにいらいらしてきましたが、だめ、めそめそしてはだめだわ、何とかなるも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com